



ゲオルク・フォルスター : 『人種に関する付言』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006161">https://doi.org/10.24729/00006161</a>

# ゲオルク・フォルスター：『人種に関する付言』

船 越 克 己

1

フリードリヒ・ハイネリヒ・ヤコービあてのゲオルク・フォルスターの書簡のなかに、つぎのような個所がある。「哲学的予備知識の欠如から、いやもっと厳密にいうならば、わたしは哲学的隠語（jargon）を理解できなかったので、カントと論争をはじめました。いまにいたっては衆人環視のなかで、砂場に投げ落とされる馬乗りの役割を演じる危険を冒しています。やっこさんは自分の専門用語（Kunstsprache）を使って、追い立てられたハリネズミの難攻不落の、針だらけの姿へと、丸く身をちぢめてしまいました。とても立ち向かえる相手ではない、と思えるほどです。」<sup>1)</sup>（1788. 11. 19.）ここにいう「カントとの論争」とは、おおよそつぎの事態を指す。すなわち、哲学者イマーヌエル・カントは「ベルリン月刊誌」*Berlinische Monatsschrift*（F. ゲディッケ/J. E. ビースター編集）に2つの論文を発表した。1つは、『人種概念規定』*Bestimmung des Begriffs einer Menschenrasse*（1785. 11.）、他は『人類史の推測上の起源』*Mutmaßlicher Anfang der Menschengeschichte*（1786. 1.）である。直接的にはこのカントの2論文に刺激されて、フォルスターは論文『人種に関する付言』*Noch etwas über die Menschenraßen*（以下『人種論』と略記）を書いた。この論文は2回にわけて、雑誌「トイチェ・メルクーア」*Der teutsche Merkur*（C. M. ヴィーラント編集）の1786年10月号と11月号掲載された。この一種論駁の書ともいえる『人種論』に対し、カントは2年ばかりのち、フォルスターに回答を書いている。すなわち、『哲学における目的論的原理の使用について』*Über den Gebrauch teleologischer Prinzipien in der Philosophie*（「トイチェ・メルクーア」誌、1788年1月号と2月号、以下『目的論的原理』と略記）である。以上が「カント論争」のあらましである。

冒頭に引いたヤコービあての書簡は、このカントの回答の書を読了したのちに書かれたものである。引用個所のすぐあとに、カントは「どんな巧妙な手口」を使っても、「人種の問題」でかれの主張の「正当性」をわたしに説得することはできまい、とフォルスターはコメントする。つづいて、将来いつか、「もっと時間」があれば、この問題に取り組むつもりである、とヤコービに語る。しかしこのフォルスターの意図は直接的には、ついに実現されることはなかった。「物（Ding）、実体（Substanz）、エンテレケイア（Entelechie）」<sup>2)</sup>とは何か、それを「哲学教授の講義」から聞くすべのなかった「哲学の哀れな独学者 *αυτοδιδακτος*」には、「カント哲学」を学ぶための「閑暇」は訪れなかった。

『人種論』はカントとの論争という体裁をとっているが、先のヤコービあての書簡（1788. 11. 19.）で告白されるように、フォルスターの不十分なカント理解の上に成り立つ論考であることは、まちがいない。それゆえ、『人種論』はフォルスターの著作のなかでも、一見未完の、マイナーな代物のように映る。にもかかわらず『人種論』は決して看過することのできぬ著作なのだ。つまり、『人種論』

をひとたびフォルスターの生涯の実践のなかに位置づけてながめれば、それはほとんど要諦ともいえる位置をしめている、という仮定が成立する。リトアニアのヴィリニウス在住時代（1784. 11. -1787. 8. すなわち30-32歳）に書かれたこの小品は、現代のフォルスター研究の草分け的存在というべきゲアハルト・シュタイナーの視点を借りれば、フォルスターの世界観のなかで「啓蒙主義から革命へ」<sup>9)</sup>の道が開かれた地点に位置する。シュタイナーが『人種論』に読みとったものは、一は観念的な義務の教義から出発する「モラリストたち」の限界であり、他はフォルスターの「人間性の実現」への渴望であり、「思弁的思考から本当の現実把握へ」の移行とそれを基盤とした「実践」へのシフトであった。事実、『人種論』にはフォルスターの生涯を貫く不動の信念が明記されている。すなわち、「ニグロ」であれ、「白人」であれ、かれら弱者を支配しようとする「暴君のおごり」を抑制したものは、「虐げられた者の気高い自負心と抵抗」<sup>10)</sup>であった、と。

この「自負心と抵抗」に関する言説によって、フォルスターにおける啓蒙主義者から革命的民主主義者への飛躍を語ることは難があらう。むしろ、そのような飛躍の系譜を、世界周航（1772-75）以後のフォルスターの諸著作のなかにたどって行くことの方が、あるいは可能であり、意義深い作業となるであろう。なぜならば、フォルスターのあの飛躍も、思想的にはにわかには出現したものではないからだ。にもかかわらず、いわゆるワイマール古典主義文学でさえ、それを避け、あるいはそれに手の届かなかった革命の領域への飛躍をこの一つの小論、すなわち『人種論』に読みとろうとするシュタイナーの見識には、ドグマを越えた真実が感じられる。シュタイナーと見解を共有する、ジークフリート・シャイベは『人種論』の意義をフォルスターの「発展」のなかに位置づけて、つぎのようにのべる。「この論文のなかでフォルスターは、自然科学の問題を取りあつかう方法について、かれの立場を明確にし、哲学的発言の正当性をそれらの経験上の厳密さによって測定している。」<sup>11)</sup> シャイベの言明は『人種論』の方法をよく見抜いている。フォルスターにおける「経験」の重視は否定できない要素である。

それでもなお、シュタイナーやシャイベの言明に当惑させられるのも、また事実であろう。というのも『人種論』は、のちにフォルスター自身が自省して、「卓越したカント」に対し、好んで「論争を挑む、不機嫌さの調子」<sup>12)</sup>を帯びた（1790. 10. 12. ～14. J. B. ヤッハマンあて）論文と呼んだものだ。そもそもカントは「哲学者として経験的、学術的仕事のために、明確な諸概念の意義を強調する」<sup>13)</sup>のである。カントの関心はフォルスターのそれとは異なっていた。だから、かりに『人種論』がフォルスターの発展において、画期的な位置をあたえられるべき文献であれば、それがその時代の学術のなかで、どのような特徴をもつのであるのか、われわれはそれを知りたいのである。換言すれば、『人種論』が、たとえフォルスターの生涯の実践のなかで見過ごすことのできぬ重要な役割をになっているとしても、このフォルスターの論考をいま一度、時代の文脈に浸して見直す必要がありはしまいか。

しかし、それは以下の小論であつかうには、あまりにも大きな問題である。『人種論』を生んだ土壌は、何よりも18世紀後半の博物学と啓蒙主義思想である。この分野でフォルスターと直接、間接かわる人物として、カントのほかには博物学者ではリンネとビュフォン、P. カンベル、J. F. ブルーメンバッハ、ゼメリング、さらにヘルダーを、啓蒙主義者ではルソーを挙げることができよう。一見、断片的で未完の様相をもつ『人種論』を、上記の学術・思想の文脈において綿密にとらえることができ

れば、それは興味につきない考察となるであろう。さらにいえば、ケーニヒスベルク大学で24年間にわたり、毎冬学期に「人類学」を講義したカント<sup>9)</sup>の三大『批判』書のなかで、フォルスターの『人種論』によって提起された問題がどのように展開されているか、その検討も、また1つの課題となりはしないか。そのような壮大な着想は、ある意味で『人種論』のマイナー性を否定する契機をはらんでいる。だが、さしあたり『人種論』のこうした側面は示唆するにとどめるよりほかはない。

この小論においては、思想的にも、実践的にも、「啓蒙主義から革命へ」(シュタイナー)の道を切り開いたとされる『人種論』を、テキストにそって検討することにより、その意義を探りたいと思う。

## 2

興味深いのは『人種論』の冒頭の段落である。<sup>9)</sup>ここで語られる要点といえば、このフォルスターの論文は、ドイツからみれば周辺の地(ヴィリニウス)から発せられた、「啓蒙主義」に対する懐疑の書である、ということになる。この部分はコスモポリタン(世界市民)たるフォルスターがドイツ啓蒙主義に対して、どのような態度を対置しようとするのか、それを簡潔かつ詩的に示している。詩的あるいはエッセー風の文体で書かれているせいばかりではあるまいが、従来さほど問題視されなかった個所のようなのだ。しかしそこに「啓蒙主義から革命へ」変身していく、フォルスターの体質が透けて見えるのだ。居住空間を何度かドイツの外部に体験し、かつみずからも旅行者であったフォルスターにとって、ドイツという国とその歴史・思想は絶対的価値をもちえなかった。その事情は後年、C.F.フォスあてのフォルスターの書簡(1792.11.21.)が記すところである。すなわち、わたしがずっと「プロイセン人」でいるべきだ、というあなたがたの願望は、わたしの「原則」ならびに「自由への愛」<sup>10)</sup>とまったく相いれないものです、と。エリック・リードは「異人」、「辺境」人間、「境界」人間ともいうべき旅人の「移動性」を論じた書のなかで、「旅は、慣習からの自由な、より普遍的な価値を明確化するのを旅人に可能にする」<sup>11)</sup>と指摘している。それだけではない。「移動は境界を越える空間運動の体験」<sup>12)</sup>(強調は筆者)なのである。まさしくフォルスターは多くの、あまりにも多くの空間境界を駆け抜けてきた旅人であった。10歳にして体験したヴォルガ流域の調査旅行、イギリスへの移住、3年にわたる世界周航、8週間たらずであったが「多くの重要人物に出会った」<sup>13)</sup>パリ旅行(1777年10-11月)、ドイツのカッセル教授時代、そして中欧旅行を経て到着した北方の地、ヴィリニウスでの大学教授時代。フォルスターの旅はどれも、生活の糧と博物学研究によって強いられた空間移動であった。それはリードのいう「土地・場所・領土の論理と秩序とは別の、独自の論理と秩序をもった体験の構造」<sup>14)</sup>をフォルスターに植えつけた、といえるのではない。

『人種論』を執筆するフォルスターの視座はさしあたりリトアニアに置かれる。フォルスターは自分の位置を「サルマティアの深い森の奥地」と呼ぶ。言い換えれば、「まだ1321年にはゲディミンが野牛を狩り、雷神ペルクーナスに捧げられた永遠の火がようやく400年まえに消えた土地」<sup>15)</sup>である。ゲディミン(またはゲディミナス。1275年ごろ-1341年)はリトアニア大公と称して、首都ヴィリニウスを建設し、東方ロシア諸領を支配下におき、ヨーロッパで最後の異教の大国を作り上げた

人物である。<sup>16)</sup> ペルクーナスとは古代のリトアニア、ラトヴィア、プロイセン人の最高神である。この異教の神は、J. ボブロフスキーの詩集『サルマティアの時代』のなかで、ドイツ騎士団によるブルーセン人（古代プロイセン人）の殺戮の歴史を叙述する「ブルーセンの悲歌」<sup>17)</sup>（1952）で、われわれにおなじみの神である。しかし、この異教の神はやがて背景に退かされ、1385年にはヴィリニウスにカトリック司教座が設立された。

フォルスターが「サルマティア」の居住を快く思っていたわけではない。事実はその逆である。しかしフォルスターにとって、このリトアニアの首都は「啓蒙主義」の咲き誇る「大都市」や「ドイツのアカデミー」teutsche Akademien とは対極にある「精神」空間なのだ。かの地には、あまたのテーマについて「じつに明晰で、じつに目新しい光」<sup>18)</sup>を広める「思想家」denkende Männer がいた。この辺境の地には、啓蒙主義的雑誌（「ベルリン月刊誌」を指す）に掲載された「啓発的諸論文」を徹底的に読破、批判し — ちなみにフォルスターは「それは十度繰り返すもなお興味を与う」（ホラティウスの『詩論』より）という文句を引用する — その緊迫した作業によって、みずからの「精神の麻痺」と戦う、一人のコスモポリタンがいた。

### 3

つぎにカントの2論文に対するフォルスターの「所見」をみることにする。そのままにカント対フォルスター／ヘルダーの論争の経過を記しておく。この論争はカントの論文『人間のさまざまな種族について』（1775）に連結する『人種概念規定』（1785）に端を発する。論争はそのテーマに関して、ヘルダーの『人類史の哲学のための諸理念』第1部（1784）— カントはそれをただちに書評している — と密接な関係をもつ。ついでカントはヘルダーの『諸理念』第2部（1785）の批判的書評を試み、さらに『人類史の推測上の起源』（1786）によってヘルダーに抗した。フォルスターは『人種に関する付言』（1786）をもって、さきのカントの2論文（1785；1786）に異議を申し立てた。フォルスターがカントに論を張った背景に、ヘルダーの援助なしとはしない。ちなみに、ヘルダーは書簡をもってヤコービとハーマンにこの論戦に加わるよう誘っていたのである。<sup>19)</sup> またヴィリニウス時代のフォルスターは概してヘルダーの『諸理念』を好意的に受容していたことも、また計算に入れておいてよいだろう。

フォルスターの『人種論』の根底にある態度は、「経験」から出発する方法の重視である。観察者は「幻想」を捨てねばならない。必要なものを求めるあまり、「じっさいには存在しない」ものを発見できる、と信じこむからである。何ら疑うこともせず、「あらかじめ指定された光」のなかでもものを見るのは、まちがっている。「自分の眼鏡の色」を対象になすりつけてはならない。以上は卑近ないましめ表現であるが、フォルスターは学問の世界における2つの誤った事例をもちだす。1つはリンネ、他はカントの『純粋理性批判』（1781）である。リンネは「正確な定義によって、似ているものの類似性のさまざまな度合いを区別」した。これはリンネの植物の〈性体系〉を指すのであろうが、それは「視野を拡大して」見るならば、「一面的で、生半可の事実」でしかなかった。なぜリンネは誤謬に陥ったのであろうか。フォルスターはつぎのように説く。「リンネはかれの経験から抽象した、ある種の仮定の命題に従って、かれの専門的著作を構想し、自然の生物をそのなかに収めてい

ったのです。」<sup>20)</sup> フォルスターはリンネの『自然の体系』（初版、1735）を念頭におき、それを「半世紀」まえの、「時代遅れの、欠陥ある」代物と評した。<sup>21)</sup> カントの『純粹理性批判』についても、上記の「普遍的運命」を逃れることはできないだろう、とフォルスターは予見する。これはいささか乱暴なもの言い方であるが、前後の文脈から、「思弁哲学」に対するいかにもフォルスター的な裁断として、見逃すほかはない。

フォルスターは「人種」*Menschenraße* に関しても、何よりも「最良の観察」に信頼をおく。よき観察とはたんに見ること、経験することを意味しない。肝心なのは「注意深さ、判断力、それに非党派性」であり、それを備えた観察であれば、「思弁的理論」に染まっているか否か、を問わぬ。フォルスターは人類とは何か、という問題を考察していくさいに、明らかに観察を基礎におく帰納的方法を選択する。そして不可知論に陥ることなく、正しい結論をたぐり寄せることを課題とする。「思うに批評は、多くの旅行者によって異口同音に語られる事実 *Fakta* を真実なもの、と言明してよいであろう。その根拠はまさに、じつにさまざまな人びとが、じつに異なった概念と知識をもつにもかかわらず、観察したものの叙述においては一致していたことに基づく。」<sup>22)</sup> 換言すれば、フォルスターにとっての真実はかなり明確な「概念」と「純粋に経験的な」知識の交差点に位置する。

以上のような意味での観察重視の視点から、フォルスターはまず、カントの『人種の概念規定』から1節を引き、カントの思弁と旅行者たちの経験を対置する。カントはいう。「従来すべての記述に従えば、南洋諸島の住民に固有の肌の色については、まだ確実な概念は得ることができない」<sup>23)</sup> と。それに対し、フォルスターは旅行者たち（P. カータレット、ブーガンヴィル、ダンピア、クック、フォルスター自身）の目撃を提出する。つまり、南洋には地域別に淡褐色と黒色の住民、それに完全な黒色、黒褐色、暗褐色の住民がいた。黒といっても、アフリカと同じように、さまざまな濃淡があるのだ。フォルスターの『人種論』のこの部分は、探検者フォルスターが、限られた記述を根拠にして南洋住民の肌の色を論じようとするカントの一面性を非とするだけであって、まだ兩人の人種論争の本質にかかわるものではない。

つづいて『人種の概念規定』においてカントは、南洋住民の肌の色がどれくらい「太陽と空気」に左右されるのか、そしてどれくらい「生来」のものか、わからない、<sup>24)</sup> という。また「自然」から授かった、かれらの色を知る唯一の方法は、彼らが「ヨーロッパ」において子供を生むことだ、とも書いている。フォルスターは経験的にカントのアイデアを否定する。すなわち、生まれたばかりのニグロの子は、その誕生地がアフリカでもヨーロッパでも、「黒色」ではなく、「赤色」で、ヨーロッパ人の子と肌の色はさほど変わらない。「誕生後、数日たって」黒くなる。さらにフォルスターは「気候の漸次的作用」について言及する。「暖かい国ぐにへ移動した白人の子孫はしだいに黒っぽい色となり、けっきょく熱帯地方では数世紀たてば、ほとんど完全に黒色になる。」<sup>25)</sup> 逆に、黒人も回帰線を越えれば、その子孫は黒色を失い、黒褐色、オリーブ色になる。カントの方法が信頼性を欠くゆえんである。ちなみに上記の「漸次的作用」はヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、アジア大陸でも認められる、とフォルスターはいう。

肌の色の比較について、フォルスターはカントとの論点をつぎのように明記している。「ここで問題なのは、さまざまな種族 *Menschenstämme* において認められる異なった肌の色は、気候の変化に適応するものであるか、それとも〔「ベルリン月刊誌」1785年11月号の〕403ページで主張されてい

るように、肌の色はむしろ、それぞれ固有の地方の外でも、あらゆる生殖において減少することなく維持されるか、である。」<sup>26)</sup> 上述の経験的根拠によって、フォルスターは肌の色のちがいで人類の微妙な差異の「間隔」Abstände を測ることはできない、とカントに反論する。カントによれば、「肌の色」は「遺伝性差異」であり、「種族 Menschengattung の分類区分」<sup>27)</sup> のためのかっこうの指標である。ちなみにカントは肌の色によって、ヒトをつぎの4つの「クラス」 Klassen に分ける — 「白人」、「黒人」、「黄色人」、「赤銅色の人」である。

#### 4

「トイチェ・メルクーア」10月号に掲載された、フォルスターの『人種論』（前半）は「人類 Menschengeschlecht のなかの差異の規定」<sup>28)</sup> について考察をめぐらせる。そのさいフォルスターは友人ゼメリングの『ヨーロッパ人とニグロの身体的相異について』<sup>29)</sup>（マインツ、1785）を「かぎらない称賛に値する」ものとして援用する。すなわち、1)「肌の色はニグロをヨーロッパ人から区別するあまり本質的でない特性の1つである」、2)「ニグロは外部ならびに内部の形成に関して、明らかに白人よりも、ずっとサルと一致する点が多い」。サルーニグロー白人の身体的差異について、フォルスターはつぎのように理解する。すなわち、創造物はすべて「微妙な差異 Nüancen」（ツィーママンのことば）によって結びついていることである。しかし、「どんなにサルに似たニグロ」でも「白人」とはたいへん近い類縁関係にあり、「偏差は非常に小さい」。<sup>30)</sup> 人間とサルとは、たがいに信じがたいほど近い動物種族（ゲヌス）に属すが、両者のあいだには明白な「間隔」が認められる。よって、「サルに似た人間」であっても、それは「サル」ではない、というのが、フォルスターの結論である。これは「ニグロは確かにヨーロッパ人よりもサルに近いが、にもかかわらずニグロはヨーロッパ人同様、人間である」<sup>31)</sup> というゼメリングの認識と一致している。

それでもなお、人種論においてフォルスターとゼメリングのあいだに、亀裂が認められることを見逃してはなるまい。ゲオルク・リーリエントールの論文はそれを的確に指摘しているので、ここに紹介しておく。自然のなかの秩序に関する観念のうち、18世紀に好まれたのは「段階系列」<sup>32)</sup> であった。鉱物から植物へ、植物から動物への「中間段階」が探索されたのち、人間と動物とのあいだを「仲介する形態」を見つける必要に迫られた。サルに近い、発達の遅れた民族・人種が求められ、ニグロがそれにふさわしい存在とされた。ゼメリングはそれに解剖学的所見をあたえたのである。変種を「垂直的順序の質的階段」とみるゼメリングを批判した人は、それを「水平的系列の量的可能性」<sup>33)</sup> とみるブルエメントールであった。さらに「単一発生」Monogenie に懐疑を抱き、「複数発生」Polygenie の立場に立つフォルスターも、基本的にはゼメリングの批判者であった。リーリエントールは、フランツ・デュモンが指摘した1785年以降のフォルスターとゼメリングのあいだの「個々の不協和音」を引き合いに出し、おそらく増大していった意見の相違が「人間学的問題」においても、不協和音を増幅したのではないかと問う。もっともその増幅した不協和音が、ただちに1792年の両者の決裂を招くものではなかったが。<sup>34)</sup>

それにしても、いったいフォルスターは、ニグロは「白人よりも、ずっとサルと一致する点が多い」と記して、自己の信念との葛藤を感じなかったか。憶測するに、フォルスターは解剖学

者ゼメリングの所見を最大限尊重しようとしたのではないか。ところでゼメリングの論文『ヨーロッパ人とモール人の身体的相違について』（1784）を献呈されたフォルスターは、ゼメリングにつきのように書き送っている。「モール人に関するきみの論文をぼくがまる呑みしたことは、きみも想像できるでしょう。解剖学者でないのだから、それをちょっとでも修正することは、ぼくにはむりな話です。」<sup>35)</sup>（1785.3.5.）この個所には、ゼメリングの階段説そのものに対する、フォルスターの態度保留がはっきり見てとれる。「重要な事実」をまえに、どうして「仮説と屁理屈」を申し立てるような恥さらしができるでしょう、ともフォルスターは書いている。しかし、白人とニグロの差異についてのフォルスターの真実は、つぎのことばのうちにあるように思われる。地上生物について熟慮すべきは、その「複数性」*Mancherley*ではなく、そこでつねに「扮装させられて」いるが、くり返し「透けて見える、永遠の単数性 *Einerley*」<sup>36)</sup>なのである、と。のちにカントはつぎのようにコメントしている。「フォルスター氏もまた、かれの友人である有名な哲学的解剖学者ゼメリング氏の発見によって、ニグロをほかの人間と区別することが重要である、と考えるに至ったにすぎない。」<sup>37)</sup>「単一発生」の立場をとるカントの、このコメントの意図がどこにあれ、フォルスターとゼメリングのあいだには、その考え方にやはり齟齬があったのだ。

さて『人種論』におけるフォルスターとカントの論争のうちで最も根本的な問題は、つぎのように提起される。「いったいニグロと白人は類 *Gattungen* (種 *species*) としてあい異なるのか、それともたんに変容種 *Varietäten* としてあい異なるのか、それはむずかしい、もしかしたら解答不能の学術問題かもしれない。」<sup>38)</sup> この問題はカント氏のように自然科学を「自然記述」*Naturbeschreibung* と「自然史」*Naturgeschichte* に区分すれば、早めに決着がつくように思える、とフォルスターはコメントしている。ところでこの区分をカントはすでに論文『人類のさまざまな種族について』*Von den verschiedenen Rassen der Menschen* (1775)で行っている。この論文のなかで、「自然史」は「根幹の類 *Stammgattung* の原型 *Urbild*」から派生した「変種」*Abartung* を教えてくれるはずだ、とのべている。<sup>39)</sup> 「根幹の類」の原理は『人種概念規定』において、つぎのように展開される。「人種概念」*der Begriff einer Rasse* は第1に「共通の根幹概念」を含み、第2に「不可避免的に遺伝する諸特徴」<sup>40)</sup>を含む。注目すべきは、カントにとって「人種概念」は「生殖と血統」のみが関係する「自然史」の領域に入るのであり、「メルクマールの比較」しか問題にせぬ「自然記述」の領域には入らない。のちの論文『目的論的原理』のなかの弁明によれば、「自然史」がはっきり示すことができるのは、「仮説」*Hypothesen* <sup>41)</sup>なのだ。しかもこの仮説は「合目的なもの」を発見するための「1つの指導原理」<sup>42)</sup>なのだ。このような、いわばイデーとしての「自然史」と区別されるのが、「自然記述」であり、それは「学問として、1つの大きな体系のみごとな華麗さをまとい、その姿を現す」。<sup>43)</sup> 自然史と自然記述という、まったく「異質な」働きをする2つの分野を設定することによって、対象をあくまで公平にとらえようとした、とカントは説明している。つまり、フォルスターの『人種論』に対し、カントはつぎのように自己弁明するのだ。すなわち、「自然記述」と「自然史」を分離したこと、そして「自然史」をどちらかといえば、独自の虚の学問として描出したこと、それはほかでもなく、「憶断による認識でもって、ややもすれば一方の学問を高く持ち上げることはないように」<sup>44)</sup> するためである。つまり、本来その榮譽が「他方の学問だけに」授けられなくてはならぬ場合、その不当性を避けるためである。

『人種論』においてフォルスターは、そうしたカントの弁明でのべられた、理性的認識と現実的認識の結合の意図をしっかりと理解していなかったようだ。「事実カント氏は、自然記述者にとってはメルクマールが1つでも異なれば、それによって1つの種 *Art* を作りだすのに十分である、と想定しているように見える。」<sup>45)</sup> しかし、この点についてフォルスターは完全な解答はできない、と記している。学問を体系的に扱ったリンネは「ラテン語」による区分を行っているからである。フォルスターはここで分類のための専門用語を問題とし、「もしカント氏が変容種 *Varietät* よりも種 *Art* と表現したいというなら、それはことばの混同にすぎない」と批判する。用語だけを取り上げれば、確かにリンネ的分类のような、明快な上下関係は表現できるかもしれない。しかしながら「自然記述者」があっさり「1つの種」を作りだす、というフォルスターのカント批判は早計にすぎるといわねばなるまい。この点に関するフォルスターの批判ないし誤解は、フォルスターが「自然記述と自然史の区別」を「疑っている」、ないし「拒否している」（『目的論的原理』）ことに由来しているとしたか、言いようがない。「変容種 *Varietät*（あるいは種 *Art*）」<sup>46)</sup> というフォルスターの注釈は、そもそもカントの理念にはなじまないものである。「共通の根幹」を想定するカントにとって、人類をいくつかの「クラス」*Klassen* に分類するさい、「種」の概念は禁句なのである。「人種」*Rasse* を「変種 *Abartung*（クラス区分された血統 *progenies classifica*）」と呼びたい、というのがカントの考え方なのである。「血統」*progenies* とは「生殖を重ねた結果、やっとはじめて発生する諸特徴」<sup>47)</sup>なのである。「血統」は「さまざまな種」*verschiedene Arten* ではなく、「変種」なのである。

フォルスターが専門用語を持ちだし、カントに批判を加える理由は、畢竟するに、フォルスターがカントの「単一発生」の理念を認めないことに由来している。それゆえ、「トイチェ・メルクア」10月号の『人種論』前半はつぎの文句をもって終わる。「ニグロは人類のなかの変容種 *Varietät* なのでしょうか、それとも類 *Gattung* なのでしょうか。」<sup>48)</sup> ちなみにカントにあっては、「変容種」は「自然記述」の観察の領域に、「類」は「自然史」の理念の領域に属する。

## 5

「変容種」が「類」と異なるのは、その諸特徴が「不安定」である点においてのみである、というカントの定義がどこまで「人類の諸種族」*Menschenstämme* にあてはまるのであろうか。『人種論』後半のフォルスターの考察はそこから出発する。カントが肌の色を種族の本質的な特徴としている点をフォルスターはとらえ、くだんのカント定義の根拠を確かめようとする。フォルスターは気候の影響によって変化する肌の色を本質的特徴とはみなさない。さらにフォルスターは、「肌の色以外はほひとつ不可避免的に形質継承されるものはない」というカントの定義に異議をとなえる。肌の色のほかに、たとえば「骨格の形状」がある。<sup>49)</sup>

またカントが「種族の単一性 *die Einheit des Stammes* の証明」の根拠とする「両親双方の特質の不可避免的な形質継承」<sup>50)</sup> に対しても、フォルスターは異議をとなえる。すなわち、「個々の顔の作りも、つねに不可避免的に一様に *gleichförmig* 形質継承されうるものではなく、ときには父から、ときには母から、混ざりあうことなしに受け取られるのである。」<sup>51)</sup> フォルスターがカントの「中間被造物における形質継承の一様性」の原理に反対する理由は、つぎのカントの主張に由来

する。それを簡潔に言えばこうなる。異なる組織をもつ男女の混血生殖の結果、その両親の種を半分ずつ受け継いでいる子供、すなわち「半種の」*halbschlchtig* 子供が生まれれば、両親は「あい異なる人種」*verschiedene Rassen* に属す。「生殖が中間種 *Mittelschlag* を生まないならば」、この同じ類の両親は、たとえどんなに外観があい異なるろうとも、同一の「人種」*Rasse* に属す。<sup>52)</sup> このような考えに基づき、カントは人類に「4つの人種」<sup>53)</sup> のみを想定するのである。この4つの人種においてのみ、人種の特徴たる「半種の生殖」が十分に証明されるからである。

このようなカントの考えは『人種概念規定』の末尾に添えられた「注釈」の部で、つぎのようにまとめられる。「ここにのべた理論は、最初の共通の人間種族 *Menschenstamm* のなかに、まったく固有のやり方で計画された胚 *angelegte Keime* を仮定する。これらの、ある種の起源的な胚は、現存する人種の差異を目ざして計画されたものである。この理論はことごとく、これらの胚の形質継承の不可避性に依拠している。この不可避性はさきほど挙げた4つの人種にあっては、あらゆる経験を通じて立証される。」<sup>54)</sup> 念のために、カントの理論を「注釈」の結びのことばによって説明すれば、以下のようにまとめられる。人間種族のなかにはその起源において、「人種」*Rassen* を生みだすために胚が植えられていた。それらの胚は太古において、気候の要求に応じて発育してきた。そしてそれらの「素質」*Anlagen* の1つが、1つの「民族」*Volk* において発育したあとで、ほかの素質をすべて完全に抹消した。「白人の特徴でさえ、最初の人間種族のうちに、ほかのさまざまな素質とならんで存在していた原初的素質の1つが発育したものにすぎない。」<sup>55)</sup> 民族の不変的標識というべき肌の色は1つの「素質」の表出とみなしてよい。それは太古に長い時間をかけて、気候の作用によって他の素質を淘汰した結果、確立されたものだ。今後それがいかなる条件の下におかれようとも、遺伝されるべき肌の色が別の色に変化することはありえない。これは一種、進化の思想である。W.S.-コヴァルチクは、従来の「自然史」はカントによってはじめて「時間的生成の意味」<sup>56)</sup> をもつようになった、と指摘している。そのようにカントは自然史の概念を「近代の進化論の意味」に方向づけた、というのだ。

フォルスターはカントの推論する「共有の起源」<sup>57)</sup> にくみしない。カントによれば、「不可避的に遺伝する相違」は必ずしも「起源的に異なる類」を表示しているわけではない。それは「同一の起源をもつ種族 *Stamm* の一つの人種 *Race*」と関連があるだけだ。さらにカントはいう。「さまざまな組織の混合」から「不可避的に子孫 *ein Niederschlag*」が生まれるのは、それらの組織が「ただ一つの最初の種族」から生じたからなのだ、と。このような考えにフォルスターは賛同できない。さらに「同じ父親が白人とニグロを生んだ」とするカントの仮定も、フォルスターにとっては不可解であった。T.エルゼンハンスはフォルスターとカントの人種論のちがいを、つぎのように記している。<sup>58)</sup> フォルスターは「ニグロの特徴のみ」が「起源的に植えつけられている」とみなす。それに対し、カントは「不可避的な遺伝性」を強調し、ニグロ以外の「人種」*Rassen* も別の気候のなかに移されても、やはり保持されており、かれらの「固有の特質」は「気候への同化」からは説明できない。さらにフォルスターはカントとちがって、人種の相違を説明するには「2つの起源的種族」*zwei ursprngliche Stmme* が必要である、と考えている。

また、カントの人間種族の同一起源説に対し、フォルスターはつぎのような側面を批判している。「あれやこれやの気候に適応した素質をもつ人間が、摂理の賢明な定めによって、ここかしこに生ま

れた」<sup>60)</sup> という考えは、まだしも弁解の余地がある。しかし、とフォルスターは皮肉をこめてつづける。「どのような国とどのような胚が出会わねばならぬかを、ここできわめて正確に算出した同一の悟性」はどうしたことか、「急に近視眼的」になり、「二番目の移植を予見」していなかった。したがって、「一つの気候にだけ適している生得の特性はまったく目的を失ってしまう。」ならば、「二番目の気候」のなかで発育し、それに順応する「可変の胚 *veränderliche Keime* が保存されていなくてはなるまい。ここでもフォルスターは「共有の起源への推論ははなはだ疑わしい」と断ずる。このフォルスターの「最も重大な反論」に対し、カントは『目的論的原理』のなかで、つぎのように弁明する。「最初の素質はさまざまな人間のあいだに分配されたものとしてではなく [...] 最初のカップルのなかに一体化されたものとして想定したのである。」それゆえ、かれらの子孫にあっては、「あらゆる将来の変種 *Abartungen* を用意する起源的な素質全体は、まだ不分離のままなのだ。」<sup>60)</sup> だから、のちの人間たちが各地に散らばって行ったとき、かれらの「組織のなかにおいて、かれらをそのような気候に適応させる胚」が発育していった。「二番目の移植」の問題について、カントはつぎのように答える。「かの悟性」あるいは「自然」は「胚が発育をすませた」のちの「移植」のことを配慮しなかったかもしれない。しかし自然が実施した「気候への適応」によって、「気候の取りちがえ」<sup>61)</sup> を阻止したのである。とりわけ「温暖な気候と寒冷な気候との取りちがえ」を。

人類の最初の一組という概念は、たとえそれがどんな比喩を含むにせよ、<sup>62)</sup> フォルスターの経験的思考にはなじまなかった。フォルスターにとっては、「自然記述者と自然史研究者のあいだにカント氏が認めようとした区別は、完全に廃止されなくてはならない」<sup>63)</sup> のだ。すなわち、人類最初のカップルへさかのぼることを許す理念としての「自然史」に、「人種」間の身体的差異を観察する「自然記述」を服従させるカントの方法、言い換えれば、理念に経験を服従させる方法をフォルスターは容認することができなかった。

それではフォルスターは人種について、どのような考えをもっているのであろうか。かれは「変容種 *Varietät* という語」を「人種 *Rasse*」と同義語である、と考える。<sup>64)</sup> フォルスターは「人種」という語は従来あまりくわしく「定義されなかった」と認識している。この語はフランス人から借用された。それは「根」を意味するフランス語“*racine*”とラテン語“*radix*”と密な同族関係にあり、おおよそ「血統」*Abstammung* 一般を意味するという。フォルスターにとって「人種」という概念はいまだはっきり定めがたい概念であった。それでは「人種」の同義語たる *Varietät* とは何かをみることにしよう。

先に引用したが、「ニグロと白人は類 *Gattung* (*species*) としてあい異なるのか、それともたんに変容種 *Varietäten* としてあい異なるのか」という問題はフォルスターの最大の関心事であったといってよい。アフリカ人とアジア人が出くわしたとき、なぜかれら2つの人種がたがいに子孫をつくることができるのか、という問題に言及したとき、フォルスターはそれを可能にさせる理由を2つ挙げる。かれらが「たがいに境界線が非常に近い種 *Arten*」としての存在であるか、あるいは「一つの類のなかの変容種」*Varietäten von einer Gattung* <sup>65)</sup> としての存在であるからだ。フォルスターの理解では、「消すことのできない、識別のメルクマール」をもつのが“*Arten*”であり、「混血ではなく、移植によって一方が他方に変化することができるのが“*Varietäten*”である。つまり、アジア人とアフリカ人がたがいに“*Art*”として対峙すれば、相互のあいだには薄い、歴然とした障

壁が存在し、“Varietät”として対峙すれば、その障壁はせいぜい気候が作りだしたものにすぎない。であるから、ニグロと白人とがそれぞれ“Varietät”としてあい異なるとすれば、両者のあいだの障壁はきわめて薄い、といえるだろう。別の個所でフォルスターは、白人とニグロの肌の色は混血の場合、おそらく「一様に同種形成する」gleichförmig nacharten だろうが、白人と黒人を「同一の類の変容種（人種あるいは種）」Varietäten (Rassen oder Arten) derselben Gattung<sup>66)</sup>として紹介していただろう、とのべている。またある個所で、「別べつのメルクマールをもつ2匹の動物」を交尾させ、その結果、生殖能力のある中間種が生まれれば、その両親はたとえ「Varietät（あるいはArt）」として異なっている、「同一の Gattung」である、としている。<sup>67)</sup>

以上のことから、フォルスターが、ニグロと白人は同一の類（Gattung）に属する変容種（Varietät）としてあい異なる、とみていることは明らかである。

## 6

われわれは、フォルスターの「変容種」Varietäten の概念は上にのべた意味での相互変化を前提としている、と理解する。すでにカントは『人類のさまざまな種族について』において、“Varietäten”に関し、それは「しばしば同種形成する nacharten が、恒常的にはしない」人びとを指す、と規定している。ちなみに、“nacharten”とは「あらゆる生殖において変種の区別 das Unterscheidende ihrer Abartung を恒常的に保持する」ことを意味する。<sup>68)</sup> つづめて言えば、“Varietät”という概念はフォルスターにおいては流動的要素を、カントにおいては区別の要素を強くだしている。それは人種に対する両者の見解の相違の現れであり、前者は総合的であるが、あいまいな点を残す。後者は分析的で、明晰な説明をしている。

畢竟するに、両者の人種論の齟齬は、カントが肌の色の相違を「遺伝的区分」に求めたのに対し、フォルスターはそれを「気候」の影響に求めたことに由来する。しかしフォルスターとて白人とニグロがある気候のもとで、それぞれ両極の色に変化しうるとは考えていない。「そのような実例は存在しないし、おそらく永久に現れないにちがいない。」<sup>69)</sup> そこでフォルスターはつぎのように記すのである。「カント氏がニグロと白人のあいだの永続的相違についてのべていることすべて」を参照するならば、「2つの異なる種族 Stämme」が「土着民」Autochthonen として、世界のさまざまな地域に現れたことは、わたしにも少なくとも「ありそうにないこと、あるいは不可解なこと」とは思えない。さらに「多数の起源的な人間種族が存在するという前提の方が、唯一のカップルの仮定よりも、難点は絶対に少ないと考えます」<sup>70)</sup> とのべるに至る。起源的な人間種族が2つか、それとも多数存在していたか、という想定はフォルスターにとっては、おそらく決定的な問題ではなかったろう。フォルスターがカントに論争をいどんだ最大の理由は、「不可避免的に遺伝する相違」としてカントが皮膚の色を選び、それを人種区別のための基本概念としたことにあったと思われる。

E. ランゲは、フォルスターはポーランドのヴィリニウスでの滞在を「自然諸科学の理論に関する知識」を増大させるために利用していたこと、そして「種」の発生と発展の諸問題についてフォルスターはデュフォン（『自然誌』）のみならず、ラマルクからも刺激を受けていたことを指摘している。

<sup>71)</sup> フォルスターが計画していた『自然科学ハンドブック』の草稿からもわかるように、フォルスタ

一が「本来の自然史」と理解していたのは、「さまざまな種の歴史、その経歴、その生活の方法」であったという。そこからおのずとフォルスターの人種論の展開の道筋が見えてくるだろう。フォルスターの「認識形式と記述形式」をカントの「認識理論」の文脈に浸すならば、「論理学、数学、物理学」に対するフォルスターの「無関心」は一目瞭然である、と J. ガルバーはいみじくも指摘する。「カントの客観的観照形式はフォルスターにあっては、思考心理学的ないしは文化理論的に相対化される。」<sup>72)</sup> まさしくカントが肌の色という、多彩な変化をともなう現象を「遺伝」という、すぐれて学問的、理性的標識によって把握したのに対し、フォルスターは同じ現象を「気候」という感覚的自然の産物としてとらえた。この2人の方法をわれわれはどう評価したらいいのか。

カントの人種論の功績を R. マルターはつぎのように称える。「人類のあらゆる個体の平等はカントにとっては純粋な理性によって知りうるのである。加うるにその平等は、与えられた身体に対して試みられる省察によっても、仮説的方法ではあるが、しかし同時に十分に保証された方法で確かなものとなる。」<sup>73)</sup> 啓蒙主義者としてのカントが人間の「平等」の実現に強い関心を寄せていたこと、たとえば人間を「自然の贈り物」<sup>74)</sup> の等しい享受者とみなしていたこと、人間の使命は「完全性へ至る進歩」<sup>75)</sup> にあると考えていたこと、それは『人類史の推測上の起源』が明記するところである。この思想はフォルスターの『人種論』の末尾に掲げられた「完全性の概念」<sup>76)</sup> の思想とあい等しい。こうしてカントとフォルスターは啓蒙主義者として、人類解放の同じプログラムを所持していたかに見える。そのことがフォルスターの『人種論』に対するカントの寛容な態度のゆえんであろう。

しかし、あえて両者の相違を探るならば、つぎのように要約できるだろう。何者も除去できぬ肌の色という、絶対的な遺伝の概念によって、人類を白人、黄色インド人、ニグロ、赤銅色のアメリカンディアン人の4クラスに区分することに重点をおく、カントの『人種概念規定』の客観性。それに対し、白人によって抑圧された人種である「黒人」の教化を力説する、フォルスターの『人種論』の道徳性。カントの『人類史の推測上の起源』が提起する「人類の道徳的使命の最終目標」<sup>77)</sup> の実現の道筋は、フォルスターの『人種論』によってはっきり示唆されている。フォルスターの『人種論』は徹頭徹尾、白人と黒人の対照に焦点を当てる。同じ人類でありながらサルに近い発達段階にある黒人。「理性」もやっと「子供の段階」に達したばかりの黒人。白人の権力の濫用に苦しめられる「弱者」、「奴隷」。フォルスターはすぐれて啓蒙主義的概念である「完全性の概念」をカントと共有していた。その概念を根拠に、フォルスターは黒人を擁護し、白人を弾劾する。フォルスターは黒人のもつ区別のメルクマール(肌の色)をことさらに重視しない。黒人の肌の色の遺伝子的要素をそれほど重視しない。むしろフォルスターが説いてやまないのは、「黒人の理性」Vernunft des Schwarzen<sup>78)</sup> の尊厳であった。

当時の人類学において使用されていた不鮮明な概念にもかかわらず、カントは「明確に定義された思想規定」と「建設的な研究戦略」<sup>79)</sup> を目指していたのは事実である。あるいは、いかなる観念論的傾向にもくみしないフォルスターにおいては、自然科学の分野で「逃避」の場として求めた、「粗雑な機械論的解釈法」としての「感覚主義 Sensualismus が有用で、自然科学的なもろもろの仮説の過小評価を招いた」<sup>80)</sup> と、律儀に指摘できぬこともなかろう。にもかかわらず、人類の一員としてのニグロの内に宿る「理性」の発展を心より願ったフォルスターにあって、『人種論』を執筆させた要因となった、その「経験」の内実はじつはカントでさえ触れることのできぬ性質のものであった。

それは、のちにマインツの地で、弱者を抑圧する専制政治を全力をあげて打倒しようと試みた「革命家」フォルスターのこぼれにみずからを啓示する。「いままさに奴隷状態の枷からのがれ、ひたすら自分の力を頼りに、人生の行路を歩みはじめる人間の最初の試みは、まだ無骨でおぼつかなくみえるかもしれない。にもかかわらず、それらの試みは人類の友の胸のなかに一つの希望を呼び覚ます。その希望があればこそ、人類の友は自分の種族の運命の賢明な指導とその運命の道徳的因果性に絶望することはないのである。」<sup>81)</sup>

## 注

### テキスト

- Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe. Hg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berlin (Akademie Verlag) 1958 ff. それを AA と略記する。
  - Kant, Immanuel: Werke in zehn Bänden. Hg. von Wilhelm Weischedel. Sonderausgabe. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1983. それを K と略記する。
- 1) AA Bd. 15, S. 208.
  - 2) Ebd., S. 208.
  - 3) Steiner, Gerhard: Georg Forster. Stuttgart (Metzler) 1977, S. 41.
  - 4) AA Bd. 8, S. 154. 「虐げられた者の気高い自負心と抵抗」(『人種論』)は革命を引き起こす可能性をもつ、という考えが、のちのフォルスターの著作『ニーダーラインの観察考』(1791-92)のなかに記される。たとえば、『レッツ卿の回想録』の一場面(AA Bd. 9, S. 123) / 「侮辱」を受けたオランダ人の胸に宿る「復讐の念」が将来起こすかもしれぬ「革命」について(AA Bd. 9, S. 319)。
  - 5) AA Bd. 8, S. 408.
  - 6) AA Bd. 16, S. 185.
  - 7) Kirschke, Siegfried: Georg Forsters Beitrag zu anthropologischen Problemen. In: Georg Forster (1754-1794). Ein Leben für den wissenschaftlichen und politischen Fortschritt. Hg. von Hans Hübner und Burchard Thaler. Wittenberg (Martin-Luther-Universität Halle) 1981, S. 73.
  - 8) Ebd., S. 73.
  - 9) AA Bd. 8, S. 130 f.
  - 10) AA Bd. 17, S. 248.
  - 11) エリック・リード(伊藤 誓訳):『旅の思想史 ギルガメッシュ叙事詩から世界旅行へ』(法政大学出版局) 1995、93ページ。
  - 12) 前掲書、79ページ。

- 13) Forsters Werke in 2 Bänden. Ausgew. u. eingel. von Gerhard Steiner. Bd. I, Berlin und Weimar (Aufbau Verlag) 1968, S. XIV.
- 14) リード: 『旅の思想史』 79ページ。
- 15) AA Bd. 8, S. 130.
- 16) 世界各国史 13 『東欧史(新版)』 矢田俊雄編 (山川出版社) <sup>2</sup>1978、92 ページ参照のこと。
- 17) Bobrowski, Johannes: Gesammelte Werke in sechs Bänden. Bd. I, Berlin (Union Verlag) 1987, S. 33 ff.
- 18) AA Bd. 8, S. 130.
- 19) 論争の経過については、つぎの論考を参照した。Riedel, Manfred: Historizismus und Kritizismus. Kants Streit mit G. Forster und J.G. Herder. In: Urteilskraft und Vernunft. Kants ursprüngliche Fragestellung. Frankfurt a.M. (suhrkamp taschenbuch wissenschaft) 1987, S. 150 f.
- 20) AA Bd. 8, S. 132.
- 21) ただし、1776年のリンネ書評において、フォルスターはリンネの『植物哲学』 (1751) については、その「有用性」を絶賛している — AA Bd. 11, S. 8 を参照のこと。
- 22) AA Bd. 8, S. 133 f.
- 23) AA Bd. 8, S. 134.
- 24) K Bd. 9, S. 66 f.
- 25) AA Bd. 8, S. 137.
- 26) Ebd., S. 139.
- 27) K Bd. 9, S. 67.
- 28) AA Bd. 8, S. 141.
- 29) 『ヨーロッパ人とニグロの身体的相違について』 (マインツ、1785) は『ヨーロッパ人とモール人の身体的相違について』 (マインツ、1784) の増補第2版である。Lilienthal, Georg: Samuel Thomas Soemmerring und seine Vorstellungen über Rassenunterschiede. In: Soemmerring Forschungen VI. Stuttgart · New York (Gustav Fischer Verlag) 1990, S. 31の注1を参照のこと。なお1784年のゼメリング論文はフォルスターに献呈されている。
- 30) AA Bd. 8, S. 142.
- 31) Lilienthal: a. a. O. S. 52.
- 32) Ebd., S. 31.
- 33) Ebd., S. 40.
- 34) Ebd., S. 48.
- 35) AA Bd. 14, S. 293.
- 36) AA Bd. 8, S. 142.
- 37) K Bd. 8, S. 152.
- 38) AA Bd. 8, S. 142.
- 39) K Bd. 9, S. 18 を参照のこと。

- 40) Ebd., S. 75.
- 41) K Bd. 8, S. 143.
- 42) Ebd., S. 141.
- 43) Ebd., S. 143.
- 44) Ebd., S. 143.
- 45) AA Bd. 8, S. 143.
- 46) Ebd., S. 144.
- 47) K Bd. 8, S. 145 — このようなカントの考え方が、かれを「進化論者」とする根拠につながっているのかもしれない。八杉龍一：『進化論の歴史』（岩波新書）1969、70-75ページを参照のこと。
- 48) AA Bd. 8, S. 146.
- 49) Ebd., S. 148.
- 50) K Bd. 9, S. 78.
- 51) AA Bd. 8, S. 148.
- 52) K Bd. 9, S. 76.
- 53) Ebd., S. 76. ちなみに「4つの人種」とは「白人、黄色インド人、ニグロ、赤銅色アメリカ人」を指す — K Bd. 9, S. 67 を参照のこと。
- 54) Ebd., S. 77.
- 55) Ebd., S. 82.
- 56) Schmied-Kowarzik, Wolfdietrich: Der Streit um die Einheit des Menschengeschlechts. Gedanken zu Forster, Herder und Kant. In: Georg Forster in interdisziplinärer Perspektive. Hg. von Claus-Volker Klenke. Berlin (Akademie Verlag) 1994, S. 122.
- 57) AA Bd. 8, S. 149.
- 58) Elsenhans, Theodor: Kants Rassentheorie und ihre bleibende Bedeutung. Leipzig (Verlag von Wilhelm Engelmann) 1904, S. 39.
- 59) AA Bd. 8, S. 150.
- 60) K Bd. 8, S. 156.
- 61) Ebd., S. 157.
- 62) のちにカントは『目的論的原理』において、フォルスターから受けた「邪推」に対し、つぎのように弁明している。「まったく同じ種族 Stamm に属することが、ただちに単独の起源的カップルから生まれたことを意味しない。ただ、つぎのことを言いたいだけである。すなわち、現在、ある種の動物の類 Tiergattung に見いだされる多様性を、だからといってそれだけ多くの起源的差異であるとみなしてはならぬ、ということである。」つづいてカントはつぎのように示唆する。最初の「人間種族」が「同種の」多くの個人から成り立っていたとすれば、わたしは現在の人間を「多数のカップル」からも、また「唯一のカップル」からも派生させることができる、と — K Bd. 8, S. 162 を参照のこと。
- 63) AA Bd. 8, S. 153.

- 64) Ebd., S. 152.  
65) Ebd., S. 151.  
66) Ebd., S. 149.  
67) Ebd., S. 144 を参照のこと。  
68) K Bd. 9, S. 12.  
69) AA Bd. 8, S. 149.  
70) Ebd., S. 153.  
71) Lange, Erhard: Georg Forsters Kontroverse mit Immanuel Kant. In: Deutsche Zeitschrift für Philosophie. 12 (1964), S. 973 を参照のこと。  
72) Garber, Jörn: Statt einer Einleitung: "Sphinx" Forster. In: Wahrnehmung - Konstruktion - Text. Bilder des Wirklichen im Werk Georg Forsters. Hg. von Jörn Garber. Tübingen (Max Niemeyer) 2000, S. 9.  
73) Malter, Rudolf: Der Rassenbegriff in Kants Anthropologie. In: Soemmerring-Forschungen VI. S. 121.  
74) K Bd. 9, S. 91.  
75) Ebd., S. 92.  
76) AA Bd. 8, S. 155.  
77) K Bd. 9, S. 95.  
78) AA Bd. 8, S. 155.  
79) Kirschke, Siegfried: a. a. O. S. 73.  
80) Lange, Erhard: a. a. O. S. 969.  
81) AA Bd. 10-1, S. 560.

本稿執筆にさいし、つぎの邦訳を参照しました。

- フォルスター (岡本伸一訳) : 『人種論を再考する』。『ゲオルク・フォルスター作品集 - 世界旅行からフランス革命へ』 (三修社、1983) 所収。
- カント (望月俊孝訳) : 『人種概念の規定』、『人間の歴史の憶測的始元』、『哲学における目的論的原理の使用について』。『カント全集 14』 (岩波書店、2000) 所収。